

43 アルブレヒト・フォン・ローレッツ

の「皮膚病論一斑」

今泉 孝

アルブレヒト・フォン・ローレッツ（二八四六一—一八八四）は明治九年五月から明治十三年三月まで、名古屋の愛知県公立医学校で医学を教えていた。オーストリアのウィーン大学で学んだ彼は、多くの講義を行ったが、そのうちの皮膚科学の講義内容が日本語に訳され、「皮膚病論一斑」という本になって残っている。これは、日本人によって訳出された皮膚科学の本としては最も早い時期のものであり、当時ヨーロッパで大いに発展した皮膚科学を我が国に導入、紹介するに大いに与ったことと思われる。そこで、まずこの「皮膚病論一斑」について紹介し、ローレッツが講義した皮膚科学がどのようなものであったか、を見ていきたい。特にヘブラの影響について、皮膚病分類と治療を中心に調べてみた。次に、日本語に訳さ

れた病名がどのようなもので、現在でも使用されているかどうか、についても調べた。

一 「皮膚病論一斑」について

明治十二年六月四日から同月十三日までの老烈^{ローレッツ}氏の講義を、訳司兼教官の田野俊貞が口訳し、教官の石井栄三が筆記し、翌十三年三月に発刊された。序文の中に「同氏（ローレッツのこと）ハ原ヲ摺設氏実験内科書ニ資リ病門ヲ区分スルニ夫ノ高名ナル皮膚病家歇^{ヘブラ}貌刺氏^フノ式ヲ用ヒ」と書かれている。このことから、ヘブラ式の皮膚病分類がローレッツによつて我が国に紹介された、とする記述が多い。

二 「皮膚病論一斑」にみるヘブラの影響

a 皮膚病分類について

フェルディナンド・フォン・ヘブラ（一八一六一—一八八〇）はウィーン大学および総合病院で皮膚科学を教えた。ローレッツは一八六六年に同大学に入学しているので、時的にはヘブラと同時期に大学にいたが、ローレッツの履修記録にはヘブラの名前がないことから、少なくとも同大学ではヘブラから直接講義を受けたということではな

いと思われる。ヘブラは、病理解剖学的変化をもとに皮膚病を十二種類に分類し(一八四五年)、これが有名なヘブラの皮膚病分類となった。

「皮膚病論一斑」では本文を十二章に分け、約二十ほどに皮膚病を分類しているが、前述のヘブラの分類とは必ずしも一致しておらず、旧来の分類に従っているように思える。いわゆる原発疹と続発疹の区別が十分でないし、病因論的分类は不十分なものの、寄生生物性皮膚疾患についての記載が充実している。

b ヘブラが記載した疾患について

疥癬については本文のうちの9分の1を割いて記載している。虹彩状ヘルペスの病名はあるが、多形浸出性紅斑については記載なし。腺病性苔癬、鼻硬腫、疱疹状膿痂疹は見られない。

c 治療について

治療については、ヘブラの方法を幾度となく引用しており、彼の影響が強く現われている。

d 病名について

鱗苔癬(乾癬のこと)、鱗屑疹(魚鱗癬のこと)、膿苔疹(膿

痂疹のこと)は現在使用されない。Herpesを簇生小胞あるいはヘルペスと記し、pempfigusを胞疹と訳している。

三 「列氏皮膚病学」との比較

この訳書は、エドモンド・レッセル(一八五二—一九一八)が一八九四年(明治二十七年)に出版した本(第八版)からその一部を下平用彩が訳出したものである(明治二十九年出版)。この訳書では皮膚病を第十五篇まで分けて記載し、計九十二章すなわち九十二種の病名が列記されている。ヘブラの記載した病名は大部分見られる。

病名では、鱗屑疹(乾癬のこと)、膿疱疹(膿痂疹のこと)などがみられ、Herpesを匍行疹と訳しているが現在では使われない。